

## 御杖自筆「歌道拳要」について

山本和明

今般退任なさる柿谷雄三先生の御蔵書の調査を、先号でも紹介したように国文学科教員、助手で行なっている。遅々として一向に進まずといった感は否めないが、調査報告も兼ねて柿谷文庫中より一点、紹介したいと思う。

※

※

柿谷文庫の特徴の一つに、福田美楯旧蔵書が多いことが挙げられる。美楯といえば富士谷御杖門下で、特に師説を忠実に継承し、書き残した人物として知られるところであり、三宅清氏編纂『新編富士谷御杖全集』（思文閣出版、以下「新集」と称す）中にも、美楯写しのものが数多く底本として用いられている。幸いにも美楯自筆資料群を調査する機会を得て、その位置づけを試みようとしているのだが、美楯自筆資料の中でも、三〇年ほど前に美楯関連として一括購入された中に、今回の「歌道拳要」が含まれていたようである。仮綴野紙十枚からなる本資料は、一見するに美楯の筆とは異なる。周辺の資料を調査した結果、その書きざま、字体、何よりも見せ消等による文章訂正の度合いなどから、むしろ御杖自筆とみなしてよいかと思われる【写真参照】。全集にも既に翻刻される「歌道拳要」ではあるが、新集解説において三宅清氏は、その文面に誤りの多いことを指摘しておられる。後述するように、その文面の誤りの多さは、何よりも今回紹介する御杖自筆本の修訂の多さに起因するものとも考えられるのであるが、ともあれ、原本未見ながらも、現在確認できる他の「歌道拳要」について、まずは略述しておきたい。以下の三点を確認し得た。

①竹柏園文庫所蔵本（旧合田文庫蔵本）

『竹柏園蔵書志』三三〇頁に次の記述が載る。

歌道挙要 一冊 小本

「歌道を知らむには、先づ言語と詠歌の別を知るべし」と説き起して、奥に「文化十四年十月下浣 御杖」とあり。文化（注―文政の誤）仲秋の福田美楯の跋あり。「合田文庫」の印記あり。

本書は、旧集（国民精神文化研究所『富士谷御杖集』第三卷・昭和十三年三月廿五日発行）の底本である。同集が佐佐木信綱『日本歌学史』と竹柏園文庫とを主要な資源として、御杖の著作を刊行しようと試みたものであることは、周知のこと。本文の間違ひが多く、ために新集では底本に採用されなかつた。原本未見、旧集翻刻本文に従う。

②高岡市立戸出図書館本

新集第四卷（昭和六十一年二月二十八日発行）所収「歌道挙要」の底本。文政七年甲申仲秋、美楯奥書あり。頭注に「篤好曰」とある。篤好とは御杖門人五十嵐篤好のこと。原本未見ゆえ如何ともしがたいが、戸出図書館本が五十嵐篤好門流関係の家に所蔵されていた図書であることを思うならば、美楯より篤好が借覧、書写した系統のものであろう。三宅氏によれば「此本にも間違や脱文があつて、完全ではない」という。新集翻刻本文に従う。

③国文学研究資料館所蔵本（請求番号八一―三五）

※国文学研究資料館紙焼写真本による

「甲辰歳月次兼題」と合綴された写本。他の二本と同様、文政甲申仲秋の福田美楯の奥書あり。次いで「かゝるふみ的美楯方にありしをかり得て予うつしおくものなり。弘化二年乙巳立春 北辺三世 祥運」との書写奥書あり。祥運とは御杖庶子で、明治期『土佐日記燈』などを活字化するなど、御杖の学問を広めることに貢献した富士谷元広のことである。ちなみに、本書は元広門下の富成梓旧蔵書にして、その伝来明らかかなものと言える。

※

※

三点ともに美楯奥書を掲げている。今、伝来明らかな③より引用するが、①②とも異同は少ない。

故北辺成章大人の、はやく六運・五級・四具のけぢめ、さだかにさとされしより、おほみくにぶりの学びの規矩なむ、まさやかにあきらけくなれりける。しかはあれど、「かざし」「あゆひ」の二抄のみひろごりにたるに、かつく心うる人だにあらぬは、いとくうあたらしとて、御杖のうしの、敷しまの道ゆきぶりに物せられて、和魂漢才の友もがなと、そが要領にあげられたるになむ。

文政甲申仲秋

福田美楯

美楯は筆まめな人で、その文章からうかがうに、御杖没後の文政七年に「歌道挙要」を閲覧したようである。さていま、美楯奥書に注目するのは、今回紹介する柿谷文庫本に、この奥書そのものが存在していないからである。その点でも他三点と明確な違いを見せている。柿谷文庫本が、その字体、修訂の度合いを考えて御杖自筆本と考えられることは先に述べたが、とすれば、いわゆる美楯奥書所有本（以下、奥書本系）との関わりは問題となる処であろう。修訂の多さを考慮するとき、柿谷文庫本を推敲本、奥書本系を完成本として考えるのが順当に思えるのだが、一概にそう片付けることはできない。

例えば、柿谷文庫本冒頭近くに、割注にて「たとひさしむかひたる人にもく人により、時によるとの用也とするべし」の一節が存在する（本稿67頁3行目）。奥書本系では本文化されているが、これも続く「此故にく」という文との繋がりを考えるならば、割注である方が文意が通じやすい。また、いわゆる詞づくりの手段を説明するくだりでは、柿谷文庫本（本稿73頁12行目）は、補入・追記がなされており、それゆえに「以上みつ」の示す「三具」が何を指示しているのが明瞭で、続く文もその三具に関する逐次説明となっていることが容易く見いだせる構成となっている。ところが奥書本系では、本文に組み込まれたために少々不明瞭といった印象を与える。総じて柿谷文庫本が、当初の形態をそのまま示していることで、却って論理構成が明らかなのに対し、奥書本系では、補入箇所や割書などを本文

化していることで、文意が取りにくい箇所が生じているのである。文意には涉らぬまでも、柿谷文庫本で見せ消となっている箇所が、奥書本系諸本で共通してイキとなつていることも多い（一例として柿谷文庫本では「神典」を消して「神書」としているが、奥書本系では「神典」のままである）。とすれば、新出資料である柿谷文庫本が、他ならぬ美楯自筆資料群の中から見いだされた点をも考慮するならば、或いは美楯閲覧「歌道拳要」は、柿谷文庫本そのものであつたとの想定も可能ではないだろうか。そして、美楯自身が書写する段階で、補入や見せ消箇所までも忠実に写すのではなく、それらを校訂した本文を作成し、それに奥書を付与したと考えればどうであろうか。その美楯書写本が、一連の奥書本系の祖本とすれば、奥書本系のもつ不明瞭さの所以が、美楯書写時における補入箇所の本文化や見せ消の誤認ゆえと考えられ、説明がつくように思われる。これは柿谷文庫本の推敲箇所の多さ、野線と重なる所に記された細字を見ると、起こり得ることと云わねばなるまい。それでも柿谷文庫本を忠実に辿っていくとき、その文構成の明確さは、奥書本系に優るものがあり、より積極的に評価しうるのである。

勿論このことで、柿谷文庫本を推敲本とし、奥書本系を完成本の系統にあたることを否定しきれた訳ではない。両者の間に御杖清書本の存在を想定することは可能だろうし、現に柿谷文庫本にない表現が奥書本系に存在する例もある（末尾近くに「上世の人の歌のよみ所、四具のけちめをくはしくりて、さてよみえたるをぞいふべき」といった文が奥書本系に存在する）。問題は残るが、とまれ柿谷文庫本に見いだせる推敲の軌跡が、御杖の思索の過程をうかがうに重要な資料であることは揺るぎない事柄であろう。加えて①から③の奥書本系諸本が、書写段階でそれぞれに目移りや書き誤りが生じている可能性が高い。ために現段階で依拠すべき本文として戸出文庫本を採用した新集の翻刻本文においてすら、補訂が必要とされたのであり、それでもなお文意の通じない箇所が生じてしまつていたのである。柿谷文庫本の登場によって、これらの本文を相対化することが可能となつたのである。

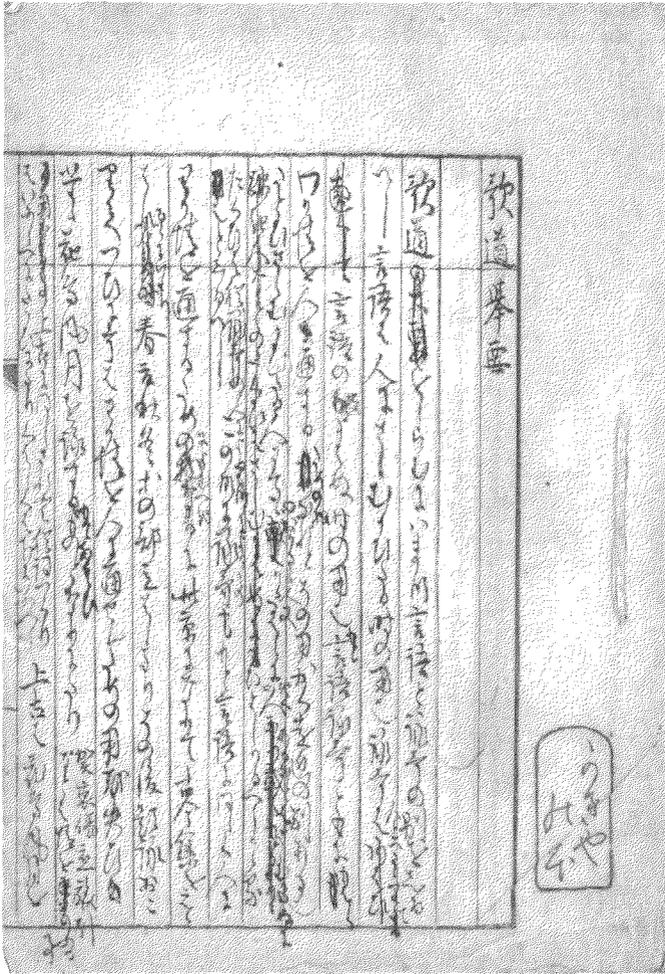
※

※

柿谷文庫本は縦二四・五糎×横一七・五糎、一面十三行書野紙十枚仮綴、「かきやの本」蔵書印有。末尾に「文化十四年丁丑十月下流」とあるが、奥書本系のように「御杖」とは記されていない。成立時期も、文化十四年段階から以後推敲が重ねられていたものとも考えられるため、ひとまず文化十四年以降としておく。「歌道拳要」の内容だが、新集解説に三宅氏の説かれる処に尽きる。美楯奥書中の「そが要領にあげられたる」という言葉が示す如く、本書は御杖の歌道説の骨子を要領よく簡潔に纏めたものとなっている。神典関連の述懐が少ないのは、一方で『神典拳要』なる書を記しているためであろう。

今回の翻刻に際しては、読みやすい本文をめざし濁点・句読点を任意に付した。相反するようだが墨消や見せ消、補入を残し、どのように修訂していったか分かるようにつとめた。へゝ内は割書箇所である。上欄やのどに記されたもので、そのまま復元しづらいものは、【 】で注記し、末尾に一括して掲げている。

本書の翻刻をお許しくださった柿谷雄三先生に深謝申し上げます。



柿谷文庫 歌道拳要

歌道拳要

歌道の大意を知らむには、まづ言語と詠哥の別をしるべし。言語は人にさしむかひたる時の用也。詠哥は人とへたがけあはひ  
 遠くしれ言語の及ばぬ時の用也。言語詠哥ともに、杜はわが情を人に通ずるための物杜ゆなれど、その用、かく遠近の別  
 ある也。へたとひさしむかひたる人にてても、或はかたはら心おかる、人文に人あり或はあるなごはさしむかひぬにもどより賤き人などのたひはさしむかひぬ  
 杜はひとしかるべし。かゝるたぐひは、猶詠哥の用也人により、時によるものとしるべし。此故に詠哥も、もと言語に同じく、人にわが情を  
 通ずるための物によむべきなるに、此京になりて「古今集」をえらばれけり時、春夏秋冬等の部立はじまり、其後題詠おこりて、  
 つひに哥はわが情を人に通ぜんための用を失ひて、たゞ花鳥風月を詠ずるものとなりたり。賀哀傷恋旅別などは、  
 情を通ずるのぶる事杜なる事上古に同じ。されど猶詞づくりは、いにしへにたがひにたり。くはしくは下にいふべし。上古は、  
 花鳥風月をよみたるも皆、情を人に通ぜんにあはならじとてよめる物にて、杜は花鳥風月のためももて遊び物は  
 杜ははあらざりしなり。しかるに、後世人の心はては情を人に通ぜむに何事事かは迂遠にものによすべきとおぼゆ  
 べけれど、わが御国、善行の杜はたや行よりも言を重くする事、神典典につまびらかなり。その理、こゝにいひつくすべ  
 からねど、その大意をいはず、おほよそ言は、わが思思情のまゝを直にいふ時は、その情すなはちその人に通ずるべ  
 べ

けは日なれど、しからず。それも私情こそ通ずまじけれ。人の為を思ふ情は、直にいふ日も通ぜざらん芳あるまじき  
事  
 事柄なれども、わが為なる情はいふもさらなり、人の為を思ふ情とても通ずまじき事は、もとわが為人の為をいはず、  
 我思ふ情といふ情は、悉く私情なれはなり。かゝ私ならざるをも私なりとするは、すぢなきことの如くなれど、われ  
 私なりとして、その情は直は詞をつけ、そのわざはひ身はいたれる人古今和漢はそのためしすゝなからざるをもて  
 思ふべし。しかれども私ならざる私私のためといふ事、人みな心えがたかるべし。これその情の私なるにはあらず。  
 詞を直につくるは故にて、詞を直につくるときは、私ならぬ情も私情に同じく、人に通ぜざるをいふなり。  
 されば私情はいふもさらなり、私ならざる情とても、詞をつくる所おろそかなるまじき事柄もひしるべし。これわが  
 御国、言を貴ぶ所謂なり也。されば、わが情に詞をつけ、事、いかに心れば私、非私をいはず、わが情、人に通ず  
 べきぞといふに、神武紀に「以諷歌倒語掃蕩妖気倒語之用始起乎茲」とある。わが国、言のつけざまをさとされ  
 たる濫觴也。この「倒語」といふ事、倒とは、たとはゞゆくをゆかずといひ、見るを見ずといふ、これなり。され  
 ど猶ほはしくいはず、おもふ所をいはずして思はぬ所に詞をつくる、これ倒語と心うべし。このゆゑに古人、そ  
 の思ふ情をば直にいはずして、思はぬ花鳥風月のうへに詞をつけられたるものなり。けり詞のうへはたゞ花鳥風月に  
 して、その情をよせたるものとはさらにみえざるが故に、後世の題詠のごとくよめる物ぞと心え、古今集は四季等の  
 部立をせられしより、つひに題詠さかりになり、よせたる情ありともしらず、たゞその思はざる花鳥風月をば、か

へりて主のごとく心うる事となりはてにたり。かく御語する事たれも直にいはしむるべきはなご思ふ。遠慮なるぞといふは、私ならぬ情はいふもさら也。たとひ私情にても、きり人の心は通せん事をむねすれば也。たとへば人のもたる物をひそかに取る時は偷盜となり、強て乞ひ取る時は多欲といひ、その物をばその人の心から贈らんにそれを得たるものは偷盜多欲と名づくる事なきがごとく、その物を得たる所は同じくして偷盜多欲におつるとおちざるとの別、たゞその人のゆゑす所をするとゆゑす所をするとにあるを思ふべし。されば、詞をわが思はぬ所へつくる事、あるひは不實のわざのせしむる思ふ人もあるべし、或は謎々のやうに思ふ人もあるべけれど、さらにさるわざにあらず。たとひいさゝかも私なき事とても、人のゆゑす所を詞とする時は、猶私におつる事、彼偷盜多欲のたとへのごとくなれば也。この故に、思はぬ所を詞とする時は、きく人その心もて察して、わが思ふ所におもひいたるべし。しかる時はその端を起す所、われにあらずして人にあるが故に、おのづからゆゑす所あるべきが故ぞかし。古人思はぬ所に詞をつけたる法、くさくにしてかぞへつくすべからねど、そのひとつふたつをいはず、旅にして家の妹を思ふ心をよまむとては、衣なれやぶるれどもときあらふ人なるをわび、わらめしきある人をうらみむとするに、外をふかくたのみしわが心のをもどきなどの如し。この倒語に井様あり。一は比喻なり。比喻とは、たとへば花のちるをもて無常を思はせ、松のときはなるをいひて人の寿をさとす、これ也。二は比喻にはあらずして、直書なりぬ、これ也。は妹を見れしといふをば、妹が家を見れしとよみ、人の贈りものを謝するに、その物の無類なるをよむ類也。此中

には~~凡人~~はいへるがごとく物事のうへにて倒をいふも<sup>と</sup>あり。など人は白地を~~さ~~る地といふがごとく。又<sup>情</sup>思のうへにて倒をいふ二種ある也。<sup>事まへにりへるがごとし。</sup>これが事がらに○よる事なり。この二様のうち、比喩はよみやすく、そらすはよみがたきもの也。<sup>此故にそらす方を倒語のいたりとはすべき也。</sup>しかれども、これまた事がら、時宜によるべき事也<sup>にて、所謂は</sup>この二様をおしこめて倒語といふ。これ即○<sup>神武紀にいしはゆる</sup>諷哥なり。この倒語の事、よにかくれて千餘年なれば○いと難きわざのごとく<sup>おほゆめ</sup>懸べけれど、しからず。たと<sup>まづ</sup>は~~ト~~今哥一首よまむとするに、かうく<sup>の</sup>のすぢをよまむと思ふその情は、詞の○<sup>たえて</sup>なき所也。さて、その○<sup>わが情の</sup>一筋より外は、宇宙のうちの物事詞は悉く<sup>わが用をなすべきれう也</sup>その一筋のための冊をなすもの也。此故に、直にて詞をもとむれば、もとより詞のなき所なるが故にせばく、その直をのぞきてその餘をもとむれば、廣大に○<sup>し</sup>てはかりなき也。かゝる廣狹ありともしらず、後世、人は直言をば実情をのぶるなど心えて、ひたすら直に詞をつけむとするが故に、いと苦しくからくして、詞を○<sup>おもひ</sup>えても稚く拙<sup>こらくし</sup>きはもとより詞のなき所をしひてつくるが故也。直を除きて詞をもとむれば、廣きが故にくるしき事なく、しかも変化自在<sup>のこころなる</sup>の~~冊~~すべき也。かばかりのたがひめある事、よみしりて後ぞ思ひうべき○この直を除きたる詞には、こ<sup>しかのみならず</sup>とくく神やどり給ひて、そのいはざる所のわが情をたすけ給ひ、人に通じさきはひ給ふその詞をつかさどり給ふ神をば、言靈とはいふ也。直言には此言靈なしとするべし。言靈なしという所謂は、わが思ふ情のまゝを直にいふは、わが力<sup>をたのむ</sup>を得てわが情を人に通せむとするわざなれば、神の御心あはれみ給<sup>はねはせ</sup>ゆる御~~と~~ちなれば也。たと<sup>は</sup>才畧ある人は、かたはらよりたすくるものなきが如しとするべし。万葉集第十三<sup>三十一</sup>へしきしまのやまとの国は云々同集卷五に

懐良  
へ神世よりいひつてけらく云々続日本後紀の哥にへ言たまのまさき国とぞ云々などみえたる、これ也。この巻五なる  
憶良ぬしがうたにへ今のよの人もことごとめのまへにみたり知たり○云々とよまれけるをみれば、その世までは此言靈の道、よに人もしれり  
し事明らか也。此京になりて、やうく此道かくれゆきけれど、貞観の比までは、そのなごりありきとおほしき也。  
返々古今集の部立より、四時の景物ども、もと諷諭の為のものともしらずなりて、つひに題詠におちいれりへ詩の詠  
物のごとし、~~此れも~~哥の巧拙を論ずる事、よにさかりになれり。されば、所詮は後世の哥のよみざまは、哥合の弊な  
る事明らか也。寛平哥合などは、後世の哥合のごとく左右をわかち、判者これを判じて勝負をなすことはなくて、絵  
合・根合などのたぐひにて、たゞ哥どもをあつめられしものなりしに、天徳哥合にはじめて左右にわかちて勝負をた  
てられたり。これ後の哥合の祖也としてそれよりそのきそひさかりに成其、つひに獨鈷鎌首にいたれり。此故に判者に難  
ぜられまじきやうにのみ哥をよみならひて、~~此れも~~なこと故もな事なき哥をば、正風などなへ、かへりて古をそし  
り或はさし置など、えもいはぬひが心えどもよにはびこれり。されば、詠哥の教などいふものもまことに哥道の本いに  
はあらで、みなよの判者の詞をのりとす。げに判者は、そのよに宗たる人々なれば、信受するもことわりながら、  
哥道の本意こそあれ、哥合のよみかたどもを、大かた哥道の教のやうに心えたるは、~~此れは~~世あまはしき事也。かゝるさまに成行  
たるそのおこりをたづぬるに、倒語のをしへをうしなひて、題詠此れはくみをあらそふことゝなれるが故也。もと哥一  
首の心よりなり出ることをいはず、まづ第一に情、第二に詞づくり、第三に哥となる次序也。題は悉この詞づくりの

うちにある物なるが故に、まづ題をえて哥よむは、第二・第一・第三と次序する也。かく本然の次序に叶はぬわざなれば、題をえてのち哥よまむは、理にそむけりくわき道。されば予が門生、無題の哥をよみならはし試るに、此次序正しきしるしには、問じ人も有題のうたよりはその詞づくり抜群にして、すゝみもいと快し。この故にそれれ題詠は○よむまじきものなれども、今の世と成ては、哥とだにいへば題を構てよむならひとなりにたれば、一概にもいひがたければ、題詠もすむべし。しかれども、かの第二・第一・第三とみだれたる次序をばゆたはず、しひて心もて第一・第二・第三とつたひてよむべき也し。これは題をえたるに、まづその題をえぬ心になりて、さてわが情を主とたて、その倒語のためにかのをたる題を用ひてよむべき也。親属朋友など、つねに交はるうちには、さまざまいはまほしき情はおこる物なれば、それをば哥によむべき事也されど、さのみにては方角なきやうにもあるべければ、題をえてゆねははよみならふ林も亦しかるべきなり。たゞかの次序の順逆をよく心得なば、題にてよむとも難なかるべけれど、まへにいへるが如く、宇宙のうちにもとむべき詞の、たゞその題に縛せらるるがいといはせきなるべし不廣いばかりの事なる也。されば詠哥の本意は、言語を以ていふべからぬ間の用にて、その詞づくりのやうは、わが情をわれよりことわらずして、きく人より察すべき事をむね並むねと心うるより外なき事也。かく心うる時は、言におのづから靈ありて、その靈おのづからわが情をたすけて、人の心に通徹せしめ給ふ也としるべし。

おほよそ哥となる情は、古人も今人も賢者も愚者もたがふ事なきもの也。その情に詞をつくるに及びて、巧拙下

并、賢者愚者もわかれ、古人と後世の別もみゆる所也。よに趣向ととなふるものは、題をえてその題の意をさま／＼

とりなすを云。これ趣向はといふはあり、もとその情をは人の察すべき詞をもとむる○なり。同じやうなる事ながら○趣

向と心えては、此道の為にそむく所出来べき也へそむくとは、もと題をとりなすを趣向といへば也。しかのみならず、

詞を宇宙にもとむる心とは、心ちもいたくたがふ事也。かく詞をもとめむは、その詞づくりをするに心えあり。万葉

集卷卅三八九 あしはらのみづはしきし書のやまの国は神ながら言拳せぬ国云々へ○猶いむ多けれど畧す。この心は、凡言語を胸むは

れども神道にしたがへば○おのづから事情通ずるもの世の心にてしを神書はをへられたり。されば、神道はなはしたがへば、言

語は胸ふるは及ばざる物なるが故は、言拳せぬ國とはいふは、これわが国の風俗なる也。されど事がらにより時に

よりては、いはで叶はぬ時必あるもの也。しかる時、言語はもあれ哥はもあれ御語すべき。せんは御語といへば、

とわり過なるは言拳せぬ國のでふりにそむくべし、いかにも言すくなに、すこし理たらぬやうに詞をつくる

べき也。後世「哥はをさなくよむべし」といふ教あるも此ゆゑ也。これひとへに人の心も察せんことをむねとすれは也べきが

ゆゑなるをかし。此故は理過ぎらんやうは、言すくなに詞をつくらんに、さまざまの道具あり。いはゆるよせへ序

哥なりへ／うちよせへ序哥のみじかき也／冠詞へまくら詞なり／脚結へてにをはなり。亡父、以上みつを三具と

いへり／など、これ也。よせ哥は、後世はれもただ詞のいうならんやうによむわざ也とのみ心えられ、しからず。

はれかの言拳せぬ御國ぶりは女人の心にゆづらむがために、わざと本句へ上句なりをば筆意の物をおく也。うちよ

せは、此よせ哥の短きにて、これは~~此~~世~~哥~~の~~比~~日本句より一句二句無益の詞を置~~く~~る也。たゞ長短までにて心えはよせ哥に同じ。冠詞は、うちよせにひとし<sup>く、句を冠らする也</sup>。されどうちよせは、無益の詞~~な~~が~~ら~~その事は比すべき物をおくを~~共~~冠は、たゞ秀句のやうにいひかくるを云ふがたがへり。心得も尚~~共~~<sup>よせ哥うちよせ</sup>に同じく、そこに~~い~~べきは~~は~~ありながら、こ<sup>は</sup>とわりすぎむことを思ひて、わざと無益のものをおく也。これらの詞、皆言拳せぬ<sup>の</sup>国<sup>の</sup>○ふりよりの事は<sup>おこりて</sup>、われより理すぎんことをいむが故の~~淋~~<sup>手段</sup>なる也。調のみやびのためのやうに心え来れるは、もと哥をよむべき道をくはしくせ~~共~~りし也が故ぞかし。されば、その哥に無益なる詞をおくが本意なるを、後世に至りては末句〈下句也〉~~共~~よせなく<sup>三具</sup>てはとて、その冠詞のよせをば末に~~お~~く<sup>しひて</sup>などなれる、いと浅ましきわざ也。脚結は<sup>詞のたすけなれば、</sup>たは~~は~~哥<sup>△定し</sup>此~~共~~共<sup>に</sup>肝要なり。亡父、詞を~~み~~わ~~か~~ち~~て~~挿頭<sup>兼</sup>装<sup>兼</sup>脚結といふ。挿頭<sup>兼</sup>装<sup>兼</sup>てもおほかた哥よむに物の名は変化なきものなるが故に、己達も初学も、用る所に巧拙<sup>ある事</sup>○なし。ただ三具は、よみ人の<sup>力</sup>巧拙による物也。それ<sup>つきて</sup>中<sup>に</sup>○、ことに脚結は~~共~~共<sup>兼</sup>具<sup>兼</sup>の<sup>兼</sup>鹿<sup>兼</sup>なるまじき事にて、哥一首の意は、たゞ脚結の意なる也<sup>兼</sup>物名は<sup>兼</sup>死物也。脚結は<sup>兼</sup>活物なり。しかのみならず心うべき事は、すべて両端をいはずればその理尽ざるを、片方~~共~~ばかりをいひて両端をしらするものは、脚結の専要也。これ又かの言拳せぬ御国ぶりによる事にて○<sup>今</sup>片方を○<sup>も</sup>いはむは理すぎ、しかりとていはざ<sup>らん</sup>れば<sup>たゞ</sup>理<sup>たゞ</sup>なければ、脚結もて、そのいはざる片方を思はする也。たとは、入江の葦はかれぬといふは、池などの葦はいまだかれざるにといふべきをいはずして、「の」「は」「ぬ」にて、そこを思はせ、又我こそ物おもへといふは、人はものも

思はでをるにといふべきをいはずして、「こそ」にて思はするがごとし。さればおのれ哥よまむに、脚結はことに心を  
用ふべき事いふも更なりは、古哥・古文をとかむにも、これを明らかにせずしては古作者の意をうべからず。これらみな  
詞づくりのために古來心をもちひおれし手段淋ども也。くはしくは猶かゝる手段多かぞふべからぬけれど、今はその大様をいふなり。  
○近頃の哥は先達、哥のすがたの事をいはれたる事こと。ねもごろ也。近比も、「しらべ」などいは事よにいひはやして、  
哥は句調をむねとするやうに心えたる人多し。○句調もよきにしかざる事ながら、古書に句調の事をむねといへるも  
のを見ず。みなその論、中昔より末の事也。此句調の事、詞のうはべにてなす事と心うるは誤也。近きが如くにして  
とほき事也。いかにといふに、今わがいへるがごとく、詞は大かたわが情をそらせてつくるを誦ゆいたりとす。しかれ  
ども、そのそらに遠近あり。はじめおもひよれる詞の近きは、は必わが情物なるを、いくたびも其の止案ずれば次第にとほくなるもの也。そこを  
案じぬきて、いかにも遠き所に思ひえたる○を詞とすべし。この遠近の別、遠きをよしとすべし。といふは近き  
は猶われとわが情をことわるにひとしければ也。遠きは、人の心にゆづる心いよく切なれば也。されば、人の心に  
ゆる心切なる故に、言靈のたすけ給ふ力つよきによりて、人心に通徹する所、かへりて近かるべきが故也。かく詞の  
いたりをきはめむに、哥となりて後、句調のあしかるべき程やうはなき事也。この理を弁へず、詞の条理をにつゞにずし  
て、みだりに詞のうへにて調をよくせむとするは、影をば月なりといはむがごとくなるべし。奈良以上注の人の哥の調  
よきは、みな詞の条理をきれたる所より、おのづからなれる調にて、さらにうはべにて誦つづとゝのへたるもの

にあらず。わが御国、もと○とせんかくせんと思ふ事は皆自然に成らむことをわねとするが故に、孝悌忠信も自然の孝悌忠信を貫はれたるが故は、神書の御教、さらに孝悌忠信をとぎ給はずして、ただおのづから孝悌忠信となりぬべきことを、しへ給へるに、しぬべし。されば、まづ倒語をもとめえ後、猶いくたびも案じて、いかにも○遠きに思ひえたらん詞の調おのづからよきことは、詞の条理をつくし試みて後し給へるべし。思ひしらるべき。

哥の体の事注4◇上古よりやうくうつれる事、亡父が六運の説にしろべし。されば今世の人、◆中昔世の詞は耳とほくなりぬれば、まして上古の詞は、わが国の詞ともおほえぬまでなりはたじり、此故に、今世の人上古の体をよめば、万葉体などとなへ、中昔の姿をまなべば古体なるべき事となりぬ。しかいふもことわり、みなたゞそのうはべをまねびたるばかりておこなむ物なれば也。上世の体は、上世の人の哥のよみ所、中昔にたがひたるが故に○おのづかう上古の体となれ也。中昔○以家みなまたしかり。この故に、まことに上世のすがたといふがまむとならば、まづ上世の人の哥のよみ所をくはしく後とてよみたる哥をせよむべき事也。中昔すら、はや上古の詞のつけざまをうしなひゆきて、後世のが端をおこせり。今の世となりて、~~上古の詞は直とほきが故に、ふるき体はよめば、古体をこのむと人みな思ふべけれど、~~詞のつくりざまか時勢にしたがひてうつれる物なれば、今の時勢はあもぬふるき詞を用ひんは、今の時勢にそむけりとのみ、大かたに心うる人多し。詞のつけさまのよからむ○には、後世の詞とても用ふべし。上古の詞とも用ふむべきはあらむ事也。△注5詞の条理をふかくもとめ入る時は、上古はその事もに切なりし世なりしかば、詞もおのづから倒語に切なり。中昔よりやう

く直ちかにちかく詞をつくる事となりたれば、詞もおのづから直ちかに近ちかくなり、いかに時勢なればとて、詞の道にそむかむ詞を用ひんやは。詞の道にそむくと時勢にそむくと、いづれが罪の重かるべき。此能々思ふべき事也。此故に、体は新古を論ずべからず。たゞ詞の条理をつくし、いかにも直に遠ざかりたらん詞づくりならんを、哥せのいたりとはいふべき。此は新古体の議論ぎろん紛々たれども、概するにたゞせ外体の論にて、此は直ちか詞の道をもて論ずるにあらねば、畢竟おのが直ちかのみにしたがふにて、私わがなにもせ論にはあらざる也。予みづからの哥をよむも、人を導くも、予がこのむ所ひがむ所に落おちなば、私わがなりと心づきて、いかに私なくおのれも哥せまむは、いかに私あらじ。人を導かむには、私わがなからんと思ひさせぬて、上古よりこのかた、古人の詞をつけられたるすぢをたづねて、倒語の道うかぎを思ひえたりしかば、年比この倒語の道をとき、おのれも力こそたらね、いかに直ちかの詞ことばがれんと哥せをもよむは、人をもみぢびぢは、千歳あまり、よにかくれたる言霊の道なれば、今、予がはじめていひ出たらんことのやうにおぼゆるにや。しるもしらぬもしりぢぢあさましき事にいふをきくたびに、こなたも又あさましくおぼゆ。さばかりあやしくおぼ思しはゞ、いかなるひがみぞと予がまいふことのすぢをも詰問けつもんすべきに、さる人もなく、たゞしりうごとのみみは、わが為のいきどほろしさにはあらず。道みちのため、なげかしき事ならずや。

文化十四年丁丑十月下浣

【注1】▽すべてわが思ふ情には戻リソダ事大かた人情のつねななり。ゆゑにわざと倒を詞とする事、即わが情人情を  
しむわが情に同意せしめむための妙法なる也。その理、千里鏡をもて思ふべし。

【注2】（上欄別記）此哥ども別に有之

【注3】▽情の変動をさとするものなれば、其義をくはしくすべき事いふも更也。それが中に

【注4】◇—◆（並び替えの指示有）

【注5】△一首のうちに、上古・中古・近古などの詞のまじりたらんは、いとみぐるしきもの也。詞の時代をよく  
弁じおくべき事也。

【注】（「のど」部に記す）「調の事」・「古今の体」